

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想
 - 2-1：近代の知的状況における宗教思想
 - 2-2：批判哲学から批判的实在論へ
 - 2-3：シュライアマハーの宗教哲学
 - 2-4：ティリッヒの宗教哲学
 - 2-5：波多野精一の宗教哲学
 - 2-6：ヒックと批判的实在論
 - 2-7：言語から宗教的实在へ
 - 2-8：言語論と宗教哲学
 - 2-9：次元論と宗教哲学

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
 - 3-1：聖書の神と形而上学的神 10/21
 - 3-2：強き神と弱き神、その彼方へ 10/28
4. 聖書から経済・政治・社会
 - 4-1：聖書学と社会学 11/11
 - 4-2：聖書学から社会教説へ 11/18
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって 12/9
 - 5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス (12/16)
 - 5-3：キリスト教・資本主義・社会主義 (12/28)
6. キリスト教と政治理論
 - 6-1：現代思想のパウロ論 (1/6)
 - 6-2：イデオロギーとユートピア 1 1/13
 - 6-3：イデオロギーとユートピア 2 1/20

<前回>言語論と宗教哲学

1. ハンス・ヨーナス「アウシュビッツ以後の神概念」（『アウシュビッツ以後の神』法政大学出版局）

この現代の状況で、宗教哲学はなおも可能か。可能とすれば、如何なる仕方においてか。言語論からの宗教的实在・現実へアプローチするという戦略。
2. イエスの譬えの読解過程・解釈学的プロセス・意味から指示へ

「テキスト自らに語らせること」：意味（構造）から指示（可能的世界の開示）への運動

 - ・読者からすれば、読解過程
 - ・テキストからすれば、テキスト世界の開示
 - ・テキストの事柄（指示対象）からすれば、実践化・生の再形態化（言葉の出来事）

そのポイントは、テキスト構造からテキスト世界の開示（イメージ化）とそれを自らの生きる可能的世界として自己化（イメージ化の過程に巻き込まれている）であり、イエスの譬えにおいては、読者の期待の逆転（「神の国とは……のようなものである」）がその特徴となる。つまり、ミメシス1として存在した自らの先行理解の反省と転換（自己の批判的反省と変革）、実践世界の再編であり、これがミメシス3に他ならない。

以上におけるミメシス2から3への展開は、象徴における外的実在と内的実在との相関性（読解プロセスとミメシス3は相関的）として論じることができる。新しい現実性の開示はそれを受け取る主体の転換を要求する。

3. ミメシス1, 2, 3の全プロセス=信仰のダイナミズムのモデル

他者の現実に関感できる心・新しい存在

共感的な人間性、他者への開放性→神と他者へと開かれた自己→愛の実践

4. 宗教は人間の事柄である（おそらくは本質的な）。 cf.神学あるいは合理主義的神論
人間は言語的である。

5. 宗教的実在と象徴—波多野とティリッヒ—

近代以降の世界において、キリスト教をはじめとした諸宗教は様々な問いや批判に晒されてきた（宗教は欲望の投影である、イデオロギーに過ぎないなど）。近代人は宗教を卒業した（あるいはすべきである）と言われて、すでに久しい年月が経過した。この問題状況こそが、現代において宗教哲学を論じる前提であることを確認しなければならない。

本発表では、以上を念頭に置きながら、宗教経験の事実性という視点から宗教哲学の可能性を論じてみたい。そのために参照されるのは、「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようなものでなければならないか」という視点から構築されたロイ・バスカーの科学哲学であるが、本発表では、カント批判哲学以降の思想状況における宗教的実在論の問題に対して、象徴論からの接近が試みられる。そのために、取り上げられるのが、ティリッヒと波多野の古典的な宗教哲学である。

まず、ティリッヒの象徴論と神話論を概観しよう。ティリッヒの象徴論は、一九二〇年代から五〇年代へと至る過程で様々な変遷を示しつつも、意味論（多義性、指示機能）、形態論（言語性・非言語性）、存在論（参与・開示）、生成・受容論（心理的・無意識的・社会的）といった基本的構成においては一貫しており、また宗教的象徴を論じるのに必要な包括性を有している。近代の宗教批判は、宗教的象徴との関連で、「宗教的象徴はいかなる実在も指示しない」、「神話は固有の実在に関与しない」と定式化できるが、宗教的象徴論からこの批判にいかにかん答し得るかについて、ティリッヒの神話論を見てみよう。

ティリッヒは一九三〇年の神話論で、現代の神話論を、消極的理論（還元主義的な神話論）と積極的理論（神話にその固有性を認める）とに分類した上で、カッシーラーの「象徴形式の哲学」における神話論へと考察を進める。ティリッヒによれば、カッシーラーの認識論的神話論は、カントの批判哲学を文化全般に拡張することによって、神話にも一つの独自の象徴形式としての固有性（他の領域に還元できない）を認めている。しかし、それは精神世界内部での固有性の肯定であって、神話外部の実在への指示機能を認めるものではなく、宗教経験の実在性の要求を満たすものではない。ティリッヒはここでシェリングの象徴的実在論的な神話論の意義を確認することを通して、カッシーラーとシェリングの統合を提案する。この提案は、見取り図の段階にとどまっているものの、それは、批判

S. Ashina

理論と実在論を統合する批判的実在論（カント以降の実在論）の構想と解釈できる。

このティリッヒの構想を展開する上で参照できるのが、波多野の象徴論である。波多野宗教哲学は初期の批判主義的宗教哲学から実在論的宗教哲学（高次の実在主義・人格主義の宗教論）への発展を示しており、方法論における象徴論の中心的位置づけや、象徴理解の骨子において、ティリッヒと多くのものを共有している。波多野の象徴論はその内容が基本的に宗教的象徴に絞り込まれており、象徴論としての包括性においては、ティリッヒに比べ物足りないが、宗教的象徴が他者を指示し、それによって、実在共同や人格性を成立させることを強調する点で、ティリッヒ以上に論旨は明瞭である。また、文化的生の基本的特性である「表現」を前提にそれを否定的に乗り越えるという議論を導入することによって、日常的指示の否定（中断）に基づく宗教的指示（実在的他者への指示）の生起が示唆されるなど、画期的な内容を有している（→リクール）。

以上のティリッヒと波多野によって素描された宗教的象徴論は、その後の多様な言語論象徴論によって改訂される必要があるものの、それが提示するマクロな構図（批判的実在論）は、宗教批判以降の宗教哲学を構築する上で、不可欠の基盤になるものと思われる。

2-9：次元論と宗教哲学

<言語から宗教的実在へ>

- ・素朴実在論でも反実在論でもなく
- ・人間的現実性の反省から

↓

では、言語論から再構築される人間的実在とは？ そこにおける、宗教的実在とは？

今回は、この批判的実在論の内容について、「生の次元論」の範囲で、全体像を概観する。参照されるのは、ティリッヒであり、宗教的実在は、「深みの次元」というメタファーによって、指示されることになるが、ここでは、そこまで議論を進めることはできない。

関心のある方は、次の拙論を参照。

芦名定道「深みの次元の喪失」、村上陽一郎・細谷昌志編 『宗教—その原初とあらわれ』ミネルヴァ書房、1999年、75-92頁。

『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。

(1) 生の現象学から次元論へ

1. 次元論の文脈（1950年代以降）：宗教と文化の関係論。病・医療の問題。
2. 『組織神学』第三巻。

（本質）存在／実存（存在）／生（精神と歴史）

：有限性／罪責性／両義性、 神／キリスト／聖霊
死 罪 無意味性

3. 生の現象学(ST.3, 17)→生の両義性の記述

精神：文化、道徳、宗教の両義性

生の構造：次元論→「生の多次元的統一性」(the multidimensional unity of life)

生の動態：弁証法的過程

- ・「本質的要素と実存的要素の混合(mixture)」

・「次元」概念

・「可能性の現実化」

4. 生 = 「本質存在」「実存存在」の二重性(duality) → 両義性

『組織神学』の体系：本質存在（第一巻）と実存存在（第二巻） → 生：「本質的要素と実存的要素の混合」(ibid., p.12) = 「存在の現実性としての生」(life as "actuality of being")

5. 「次元」(dimension)という隠喩で生の現実を捉えること（隠喩は認知の問題である）。

本質と実存の混合としての生の構造論の記述 → 生の次元論

生の現実性 = 多様な諸要素の統一、存在の多様性と統一原理の探求(ibid., p.12)。

cf. 層(level)の隠喩

階層構造における上下の支配－被支配、抑圧－反抗・服従といった関係

中世のキリスト教世界・スコラ的文化創造

H.R.ニーバーの言う「文化の上なるキリスト」

↓

近代的現実性、プロテスタンティズムの原理

6. 隠喩の選択という問題：「現象学＋価値判断」という異質な方法を統合 = 「批判的現象学」

7. 病や健康の問題。

次元論は心と身体を分離可能な存在として実体化するような心身二元論（あるいは心身二層論）も否定する。身体なしの靈魂の不死性をティリッヒは認めない(ibid., pp.409-412)。

8. 「次元」隠喩は空間的領域から採用されたものであるが、それは相互干渉が存在し得ないような仕方存在の諸領域の相違を記述するのである」(ST3., p.15)。

9. 人間の生（広義の生）の現実について、無機的次元、有機的次元（狭義の生＝生命）、心理的次元、精神の次元を区別する(ibid., pp.17-30)。 → 物質、生命、心、精神

10. 多次元的統一として生：

・分離論（実体的な二元論）と還元主義（一元論）への批判

↓

物質、生命、心、精神からなる自己組織化の連鎖

11. 諸学の固有性と連関性

12. 生の生成論：「生は可能的存在の現実化として定義される」(ibid., p.30)。

諸次元相互における生成の順序

・新しい次元の生成。これは無機的次元から有機的次元が、有機的次元から心の次元が、そして心の次元から精神の次元が生成するという問題であり、それぞれ生命の発生、心の発生、文明の発生といったテーマにおいて従来論じられてきた。

13. 「次元の現実化は宇宙の歴史の内における歴史的出来事である」(ibid., p.26)。

14. アリストテレスの運動論と進化論との結合。

「有機的生命の起源の問いはより重大である。ここにおいて二つの観点、つまりアリストテレス的観点と進化論的観点とが対立している。前者はデュナミス、可能態という用語によって種の永遠性を強調するが、後者はエネルギー、現実態において種の出現の諸条件を強調する。しかし、次のように定式化するならば、こうした相違が矛盾を生み出す必要

S. Ashina

はないことが明らかになる。すなわち、有機的なものの次元は本質的に無機的なものの次元に現在している、その現実的な出現は生物学や生化学によって記述される諸条件に依存している、と」(ibid., p.20)。「生の新しい次元の出現は条件づける次元における諸条件の布置(constellation)に依存している」(ibid., p.25)

13. ドイツ観念論の自然哲学から現代の生命科学へ。

シェリングの自然哲学：「自然は見える精神であり、精神は見えざる自然である」(Schelling, II,56)、精神とは「まどろみ状態」から目覚めた自然である(Schelling, III,453)

14. 生自体の運動＝生成。

ヘーゲル(若きヘーゲル)の生の概念→弁証法

生の生成：自己同一、自己変化、自己帰還の三つの要素によって弁証法的に構成され、このような三要素から構成された生は、自己統一、自己創造、自己超越の三つの機能(運動)において自らを生成すると考えられる(ibid., pp.30-32)。

↓

生の諸要素によって成り立つ構造体から、自己統一と自己創造と自己超越の三つの生の運動が生じてくる。

15. 精神の次元が現実化した人間の生：

生は自らの世界を有する自己としての統一性を保持しつつ、文化的な営みを通して自己創造を行い、しかもその有限な生の限界を超えてより高いものへと進もうとする(昇華)。こうして、自己統一に関わる道徳、自己創造としての文化、そして自己超越としての宗教は、精神の次元における生の生成運動として統一的に捉えられることになるのである。

文化：意味世界の構築

道徳：人格的自己同一性の確立

宗教：意味根拠への超越、深みの次元

(2) 次元論から見た宗教

・物質、生命、心、精神の諸次元の関係をテーマとした自然哲学(自己組織化のシステム論)の構築。複雑化/相転移/全体論的パターン生成

これによって、宗教的実在についての人間学的条件を描くことが可能になる。

↓

- ・宗教は人間的な生にとって本質的な精神的次元の現象である。
- ・精神の次元における「自己超越性」(問い・探究、エロース)。
- ・宗教は先行する諸次元と多次元の統一性において連関づけられている。
 - 「宗教」を理解するには、生の諸次元についての多様な諸学問・諸科学との連関が必要になる。→ 創造と終末 → 神：始原あるいは全体概念
- ・宗教は生の現象として、その両義性を免れていない。
 - 世俗化とデーモン化との戦いとして存立できる。

↓

- ここに、経済と政治という社会理論と宗教論とが交差・連関する問題領域(文化・道徳・宗教によって構成された精神的生の構造・プロセス)がある。

この問題領域の論理構造を解明し、諸学のコミュニケーションを追求するのが、「自

然神学」の課題。

↓

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
4. 聖書から経済・政治・社会
5. キリスト教と経済学説
6. キリスト教と政治理論（?）

<文献>

GW: *Gesammelte Werke*. Hrsg.v.Renate Albrecht. Evangelisches Verlag 1959-1975

EW: *Ergänzungs und Nachlaßbände zu den GW*. de Gruyter 1971-

MW: *Main Works/ Hauptwerke*. de Gruyter 1987-1998

ST: *Systematic Theology*, vol.1, 2, 3 The Univ. of Chicago Press 1951,57,63

1951: *Systematic Theology* vol.1, The Univ. of Chicago Press

1957a: *Systematic Theology* vol.2, The Univ. of Chicago Press

1957b: *Dynamics of Faith*, in: MW.5

1961: *The Meaning of Health*, in: LeFevre (1984), pp.165-173

1963a: *Systematic Theology* vol.3, The Univ. of Chicago Press

1963b: *Religion, Science, and Philosophy*, in: J. Mark Thomas (ed.), *The Spiritual Situation in Our Technical Society*. Paul Tillich, Mercer University Press 1988, pp.159-172

1965: *Religious Dimensions of Contemporary Art*, in: John Dillenberger and Jane Dillenberger (eds.), *Paul Tillich. On Art and Architecture*, Crossroad 1987

1984: *The Meaning of Health. Essays in Existentialism, Psychoanalysis, and Religion* (ed. by Perry LeFevre), Exploration Press,1984.

- ・『組織神学』第一、二、三巻、新教出版社。
- ・『ティリッヒ著作集』白水社。
- ・『宗教と心理学との対話——人間精神および健康の神学的意味』教文館。